

弘末：続きまして、同じくタイのバーナムケムの事例を、国際基督教大学アジア文化研究所の研究員の西田さんよりおうかがいしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

西田：先ほどご紹介いただきました西田です。私はタイ国バーナムケムということで、先ほど鈴木さんをご紹介してくださったスリン諸島のすぐ対岸の、多くの人たちがモーケンではなくタイの一般の人たち、タイ民族に属する村の調査を行いました。タイトルにもありますように、「災害文化創造の試み」ということで、もともと津波に関しての文化を持っていなかった地域が津波に襲われ、タイで恐らくは最大と呼ばれる被害を受けてしまった。その地域がどのようにコミュニティを利用して災害の文化を育ててきたのかということに注目して、今日の発表をさせていただきたいと思っています。

### 1. 津波伝承の村バーナムケム

私は去年の2012年12月26日、この日はスマトラ沖地震の被災の日ですけれども、その日にこのバーナムケム村に訪れまして、スマトラ沖地震追悼記念式典に参加してきました（写真1）。今年で8年目になるわけですけれども、この日もたくさんの方がいらっしやっておりました。村の前には大きなゲートがあり、その上には「バーナムケム 災害に強いコミュニティ、津波伝承の村」と書かれています（写真2）。この村は津波の被災後、記念公園とか



写真1 毎年行われる津波追悼式典



写真2 村のゲート



写真3 津波災害直後



写真4 打ち上げられた船

数多くの追悼施設が建設されています。大多数がタイのマジョリティの人たちですので、タイ国内からも海外からも多数の支援がこの村に入って来しました。

## 2. 津波被害と復興

津波の被災状況ですけれども、全村民 5,500 名のうちおよそ 1,400 名の方が亡くなりました。この数は先ほど鈴木さんの方で発表されたよりも多いと思います。これは、住民登録をされてない方々も含めてこの数になっております。建物は 1,566 戸のうち全壊 1,210 戸、半壊 224 戸と、ほとんどの建物が津波によって被害を受けるという大惨事であったわけです。たくさんの漁船も打ち上げられ、この公園に残っているオレンジ色の船はバーナムケムの象徴として有名になっています（写真 3・4）。

津波式典のときに、インラック・シナワット首相から手紙が寄せられています。その手紙の内容を見ていますと、「防災の意識と文化」を醸成することが重要だと書かれています。これからするお話も、私たちだけが災害文化は大切だと思っているわけではなく、タイ政府そのものも災害文化を認識して、さらにそれを醸成させていく必要があると考えているということが分かるかと思います。

災害経験を文化にすることは一体どういうことなのか？これは今日のテーマですけれども、クリフォード・ギアツという文化人類学者が「文化というものを何なのか」という文脈で文化を定義しています。「文化というものは、象徴に表現される意味のパターンで、歴史的に伝承されるものであり、人間が生活に関する知識と態度を伝承し、永続させ、発展させるために用いる象徴的な形式に表現され伝承される概念の体系を表している」。非常に難しいですね。非常に直訳的に訳されていると思うのですけれども。

つまり、この「象徴」の部分で「津波」と変えて読むと分かりやすいかと思います。津波という概念がある。その概念にはたくさんの意味が付随しています。「津波」というもの聞いたとき、同時に「たくさんの被害がある」、「怖いもの」、「波が引く」、「大きな波」などたくさんの意味のパターンが想起されます。さらに、生活に関する知識と態度と同時に結びつく、これは例えば、「津波が来たら逃げる」。これは「津波」という意味の集合を受け取ったときに自動的に出て来る行動と結びついているものです。さらにその文化を永続させるシステム、つまり文化を次の世代に継承し、さらに発展させていく仕組み。これらをまとめたシステムが文化だというような考え方だと思えます。

## 3. 災害文化の醸成

### (1) 津波慰霊施設の建設

文化を記憶し、永続化させるという仕組みでバーナムケムが頑張っているものいくつかあります。その1つとして、高藤さんがお話しになったような記念になるものを伝承するということがあります。歌を歌うというのもいいのですけれども、バーナムケムの方では、例えば津波のときに被災した船を保存して、それを野外博物館として展示していることをやっていたり（写真 5）、あと、バーナムケム津波追悼公園と言いまして、一番被害の大きかった海のそばに公園を作ったりしています（写真 6）。公園には仏像でありますとか記念になる物を置き、毎年毎年、津波の発生日には追悼式典が行われるわけです。その追悼式典を 8 年間も行ってきたという経緯があります。



写真5 津波被災船野外博物館



写真6 津波追悼公園

さらに、タイは王様がおりますので、王様の誕生日のときにマングローブを植える行事が津波の前からありました。それが、このマングローブが津波の勢いを弱め、減災につながるということで、津波に関係する行事へと変容させながら行われています（写真7）。このように、昔からあった行事の中にあたらしい津波追悼の概念を組み込みながら伝承させていく。それから、先に述べたように新しい行事を作って年中行事化させる。こういったことによって、津波の経験を永続的に、そして発展的に利用していくという試みが行われています。



写真7 国王誕生日の植林

〔Maitri Congkraicak 氏 提供〕

## （2）バーナムケム防災ボランティア団

施設や行事による伝承だけではなく、より具体的に防災のために自分たちの体を使って共働してやっているとあります。それがこの村の特徴的な活動なのですけれども、バーナムケム防災ボランティア団というものがあります。このボランティア団は非常にタイで有名になっています。構成員 80 名、保健員、けがをした人を世話するものですが 40 名、ビルマ人の労働者も 20 名が参加しています。これを内務省の防災減災局というところが管轄をして、このボランティア団を運営しております。



写真8 ボランティアメンバー



写真9 救命訓練

では、ボランティア団による避難訓練を紹介したいと思います（写真8・9）。この村の人たちはみんな漁民ですので、海上で使うために無線を持っています。それで災害の情報が無線に入ると皆さん集まって来る。救命胴衣も団員分を全部揃えておりまして、村中に各地にも設置しているのですぐに行動ができます。

警報塔は衛星と情報がつながっておりまして、地震があったときに多国語で避難を呼びかけます。その際にボランティア団も道に沿って立ち、村民に避難を呼びかけます。避難はみんなそれぞれルートが決まっています。

また道の右側は人間が歩くところ、左側は車が走るところというふうにはぶつからないように区別されています。

津波の後に作られた3階建ての小学校の2階と3階は避難所になっておりまして、そこに逃げることになっています。もし身体障害者がいらっしゃるときは直接団員が行って、抱えて運ぶということもすることになっています。最後に、ちゃんと村民全員が避難を終えたかどうか確認をするということをやっています。このようなボランティアの活動をずっと続けているわけです。

### （3）村民のボランティア精神

ボランティアをやっている人たちは、一体どういう気持ちでやっているのかということ、何人かにインタビューして聞きました（資料1）。そのボランティアはいまでもやはり津波の経験をすごく意識しています。

#### 資料1 タイにおける被災の概要

『津波が起きる前はこんなボランティアなんて参加する気もなかった。津波に被災して世界中からボランティアがやってきくて、またタイの国中からもたくさんの支援やボランティアが入ってきたのを見て、自分たちもまず自分でできることをしようと思ったの。身体障がい者やお年寄りの世話をすることならできるじゃない。いまでも津波に被災した親せきの子供を引き取って育てているの。陰徳を積むという感じかしら。』

（43歳女性、2013年1月8日）

このように、全然初めはボランティアなんていうものに価値を見出していなかったにもかかわらず、内外からたくさんのボランティアが入って来てくれたのを見て一緒に行動をして、それによって彼女の中で新しい価値ができたということが分かるかと思います。こういうことを言う人は非常に多いですね。

僕が「日本から来ました」って言うと、「日本から来てくれてありがとう。実は津波の時には、私は日本人に救われた」っていうような話をしてくれるのです。というのは、ここには震災すぐに日本の緊急救助隊と医師団が入っておりまして、その記憶がまだ残っていて、そういうこ

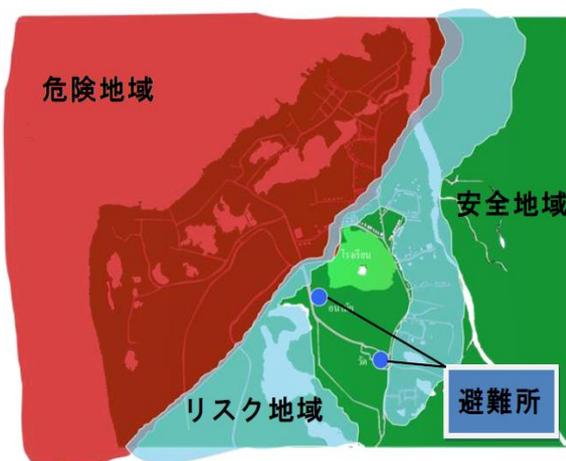


図1 村落防災計画

〔Maitri Congkraicak 氏 提供〕



写真10 バンコク大洪水での救援活動

〔Maitri Congkraicak 氏 提供〕



写真11 内務省での表彰

〔Maitri Congkraicak 氏 提供〕

とおっしゃるのだと思います。

実はバーナムケムのボランティアの活動は、自分たちの村の防災活動だけにとどまっているわけじゃないのです。2011年のバンコクの大洪水、たぶん記憶に新しい方がいらっしゃるかと思うのですが、あのときにもバーナムケムのボランティア団は自分たちの村からゴムボートを背負ってバンコクに救援のために入っています（写真10）。活動資金も自分たちのお金を使って入り、国から支援をしていません。またハジャイという近くの大きな町でも洪水被害があったのですが、そちらの方にも入って活動をしています

そういう話しを村の方としていますと、「日本の津波の際にも、『日本にも助けに行きたい』と言っただけけれど許可されなかった」とおっしゃいました。「でも私たちの代表として私たちの教官が日本に向かった」。これは確か24名だかが日本に来て、救助しているはず（※タイ政府から支援申し出があったが、実際は派遣されずタイ人医師団2チームのみが受け入れられた）。そして、「今、タイ全土でも洪水などいろいろな災害が起きている。そういった災害に対して連携して対応できるようにチームの実力を上げている」と言うのです。彼らのボランティアの思いはタイの外へも向けられているのです。写真11は去年でしょうか、内務省の方で表彰を受けまして、そのときの様子です。バーナムケムの活動は、村の外でも知られるようになってきています。そういう中で彼ら自身の意識も高揚するし、「ボランティアをしたい」と彼らの価値観も震災前と比べてガラッと変わってしまっているということが分かるかと思えます。

そう考えますと、バーナムケムの災害文化醸成というのはどういうものかと言うと、新たな年中行事に組み込む、被災地の慰霊、観光施設の建設を行う、災害インフラ制度を整える、価値観の転換を行う、ボランティア活動を行う、それから外部の認知を増やす。これによって、コミュニティの中で津波に関する概念、意識、態度を共有化していく。そして、いろんな対策を行うことによって再生産、そして継承していく。そういう概念体系、システムを作り上げることがバーナムケムの災害文化であるだろう。そして、バーナムケムは、この災害文化を中心にコミュニティの結集が進められている地域であると考えております。



写真12 プッティアウ再定住地区



写真13 ITV再定住地区

#### 4. バーンナムケムの抱える課題

しかし、バーナムケムの災害文化もいろいろ問題を抱えています。今回、2つ挙げたいと思います。より安全な土地への脱出、危険な地域への新規参入者、特にビルマ人労働者です。このことについても村の人は十分に承知しているのです（資料2）。確かにその通り、村の至る所で土地や建物が売りに出されているのです。

##### 資料2 より安全な土地への脱出

『村の人たちは津波の後に津波を恐れて村の外に移住して行ったわ。タクワパー郡都（プッティアウ地区）の方にね。ここに残っているのは漁民かビルマ人ぐらいよ。今、村のいるんところで土地を売っているでしょ』

(30歳代タイ人女性、2012年12月31日)

より安全な土地への脱出ということで、タクワパーの郊外に大きな再定住地区が2か所造られています（写真12・13）。そのうちの1つに私が住み込みをして話を聞いていたんです。例えば、そのおばあちゃんに話をしますと、「私はもう足が弱いからバーナムケムの方にいたら逃げられないから、こっちに逃げて来たの」っておっしゃいます。確かに災害文化を醸成するよりも災害のない安全な土地に逃げた方が良いでしょう。それは当然なことだと思います。しかし、バーナムケムとの結びつきがだんだん減少していくわけです。そうすると、ボランティアも参加できなくなってきましたし、災害文化も忘れられていってしまうようなことが起きています。

もう1つは新参入者の問題です。特にビルマ人労働者がバーナムケムの方に入ってきています（写真14）。これはどういうことかと言うと、バーナムケムの村の大部分が津波危険地域に設定されてしまいました。そうすると、その地価がどんどん下がっていくのです。家があるけど住む人がいない。そういう人がどんどん安い値段で売るわけです。ビルマ人労働者は貧乏ですので、その住宅を買ったり、借りたりして、港で働くということを始めます。す



写真14 漁港で働くミャンマー人漁民

ると、災害の経験もないし、概念もない、言語も共有していない、そういうビルマ人が増加してしまい、村のコミュニティも活動に参加しにくい状況になってしまいます。そうすると、ビルマ人労働者を中心とした災害文化の格差というのが広がってしまうという問題を抱えています。

以上で私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

**弘末**：西田さん、貴重なご報告ありがとうございました。それでは、会場の方から事実関係のご質問がありましたら、お受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。

**フロア A**：発表ありがとうございました。ボランティア組織による避難訓練のとき、想定されている津波というはどういった津波なのか。具体的には到達時間をどのぐらいに設定しているのかをお伺いしたくて。先ほどの鈴木さんの発表にしても、タイの島のところは2時間で到達したというのにはありましたが、2時間、3時間ぐらいの時間で余裕をみたものなのか、例えば、日本の東日本大震災のような数十分、1時間以内っていうのを想定したものなのでしょうか？

**西田**：鈴木さんが言われたような2時間のものを想定しております。スマトラ沖地震のそのままを想定しておりますので、発生が7時何分、私たちの村に到達したのは10時です。それまでの間にいくつか村にも連絡が入っています。しかし、そのとき誰も津波の意味するところを理解できなかったのです。それで、逃げられなかったということがあるので、大体2時間程度の余裕を見ていると思います。

**弘末**：他にいかがでしょうか。私なんかもいろいろとうかがいたいことがあります。それはのちほどのパネルディスカッションでさせていただきます。西田さん、貴重なご報告ありがとうございました。